

# 草原新聞

第14号

平成24年10月発行

## 力を合わせて草原を守る！

「平成23年度 阿蘇草原維持再生基礎調査」結果から



野焼きに不可欠な防火帯づくり（輪地焼き作業の様子）

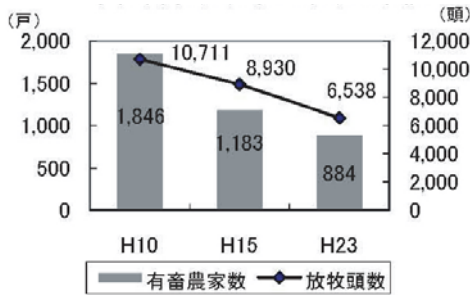
写真：大滝典雄

阿蘇の象徴とも言える草原は、地元牧野組合の方々を中心となり、野焼きや採草作業、放牧等を続けることで維持されてきた場所です。牧野組合が管理する草原（牧野）の総面積は、約2万2千ha。広大な草原を維持していくためには、毎年多くの労力が必要となります。

平成23年度に熊本県が実施した「阿蘇草原維持再生基礎調査」の結果が発表されました。ここでは、そのデータをもとに阿蘇の草原の現状を見てみましょう。

### 【有畜農家数と牧野利用の減少】

牧野の使用権を持つ入会権者は9千193戸、そのうち農家は5千637戸です。いずれも減少傾向にありますが、中でも牛や馬を飼っている農家の減少は顕著で、平成15年度調査から約3割が減り884戸になりました。牛の放牧頭数も約2千300頭減の6千538頭になるなど牧野利用の減少が進んでいます。



H10年度・H15年度：牧野組合調査  
H23年度：阿蘇草原維持再生基礎調査（熊本県）

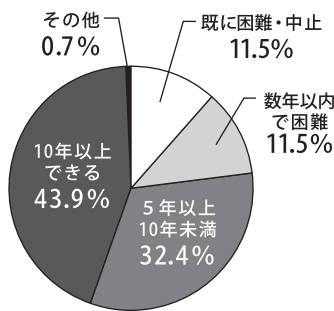
<有畜農家数・放牧牛頭数の推移>

### 【難しくなる野焼き作業】

野焼きのための防火帯（輪地）の総延長は約530km。そして、野焼き総面積は1万6千354haで、平成15年度調査よりわずかに増加しました。これはボランティア支援による野焼きの再開等が考えられます。現在、野焼き・輪地切り支援ボランティアの数は、年間延べ2千100人を超えています。その一方で、野焼きや輪地切り作業への地元出役者数は、延べ約1万1千300人。平成15年度調査から1割ほど減少し、野焼き作業は50歳代以上が7割を占めるなど高齢化も進んでいます。また、5年以内に野焼きや輪地切り作業を継続できなくなると回答した牧野組合が全体の4分の1に上ります。

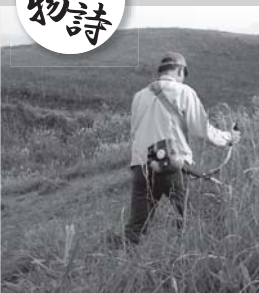
### 【美しい草原を守るために】

これまで阿蘇の草原を支えてきた地元農家が減少しています。ボランティアによる支援は拡大しているものの、草原の維持管理の継続が危ぶまれています。また、今年に入ってから、野焼きボランティアの人身事故や九州北部豪雨災害による甚大な被害が発生しました。こうした状況も踏まえつつ、畜産業の振興や野焼き等の草原維持活動の継続に向けて、地元牧野組合や関係団体、行政機関等、多くの方が協力し、取り組みを進めていくことが急務となっています。



<野焼き・輪地切りが継続できる見通し>

### 風物詩



### 朝草刈り

朝草刈りは、夏の間、早朝のうちに草原に出かけ草を刈ります。刈った草は、放牧されないで畜舎にいる子牛や出産を控えた雌牛などに食べさせます。牛たちは、青々とした採りたての草を好んで食べるそうです。

## 子どもたちの作品を募集しています！

### 第6回 あそ阿蘇の草原かを描こう！ コンテスト

●『子どもそうげんしんぶん』  
の表面のぬり絵を完成させ、  
封筒に入



ご応募いただいた作品は、南阿蘇ビジターセンター、阿蘇市立図書館(内牧)、なみの高原やすらぎ交流館、あそ望の郷くぎの、道の駅小国ゆうステーションで展示いたします。